２．取組を進めるに当たり困難であった事例について

Ａ．コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

●龍谷大学理工学研究科物質化学専攻

「東洋の倫理観に根ざした国際的技術者養成」の事例

（具体的に何を実施し、何が困難であったのか）

海外拠点を利用したプログラムにおいて、現地の大学でも技術英語やプレゼンテーションを指導している講師を招聘して、講義・演習を実施した。しかし、英語での講義や、日本とは異なる授業の進め方に、学生がなかなかついていけないこともあった。

（苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか）

学生と講師の先生との間でうまくコミュニケーションが取れなかったことにより、学生自身が演習課題の趣旨を十分に理解しないまま授業が進むことがあった。

（どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか）

問題解決のため、授業に専任教員が加わり、必要に応じてサポートを行った。さらに、講義の後、専任教員と現地講師との間でディスカッションを行い、授業の進め方、難易度、宿題の質や量について改善策を考えた。その結果、徐々に学生が演習の趣旨を理解し、講師の先生に質問する回数が増加するなどの改善が見られた。